NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK II — PUDU ALPHA

第４章　証人たちを記憶する井戸

The Well That Kept Its Witnesses

水路は、一方へ水を運び、反対方向へ義務を運んでいた。

ナディラは歩調を緩めずにそう言った。手首の灯りが、十七メートルごとにコンクリートへ埋め込まれた陶製の測量標を照らす。数字は逆順に刻まれていた。流れに沿って進む者には、帰路で初めて正しく読めるように。ロイはその反転にすでに気づいていた。ナディラが天井を一瞬以上照らさないことにも。そこには点検孔があり、光学機器を隠せるほど暗かった。ただし、すべてにまだ電源が供給されているわけではない。

「どれくらい先だ？」

「この都市がいつ建設されたと考えるかによるわ」

「距離を言え」

「現在の管轄では二キロ。旧管轄なら六百メートル」

彼女は格子の向こう、白っぽい縦の継ぎ目を示した。左側には市の塗料で、この管は廃棄されたと記されている。右側の銅札には、同じ管が現役の送水設備であり、四つの政権と一度の海面補正

を生き延びた水利信託によって恒久的に更新され続けている、とあった。どちらも新しい記載ではなかった。

STEPWELL は地図上の目的地ではない、とナディラは説明した。それは台帳が認める一つの状態だった。資格を持つ技師が真上で二十年働いても発見できないことがある。だが正しい証票を持つ者は、廃止された揚水管から入って請願人として迎えられる。どの省庁がその存在を認めていようが、いまいが。

ロイは彼女の指先の証票を見た。二つの弧が互いに折れ曲がって組み合わさる印。自分の手首で見たものと同じだった。偶然かもしれない。しかし彼の経験では、偶然とはたいてい、誰かが情報を隠しているときに生じるものだった。

「それは俺を識別するのか」

「保管上の義務を識別するの。あなた自身ではない」

「追ってくる連中以外には、誰にとっても重要な区別らしいな」

「だったら、あなたも重要だと思い続けて」

円周に階段を削り込んだ排水竪坑へ出た。五段おきに材質が違う。コンクリート、石、複合樹脂、使い込まれて黒ずんだ鋼。頭上には暗闇が伸び、蓋の裏に刻まれたアラビア語はほとんど摩滅していた。底では、古いガラス煉瓦で作られた細い橋の下を水が走っていた。ナディラは真鍮板の裏へ証票を当てた。

何も起きなかった。

証票を裏返す。やはり何も起きない。

「仲介人は、向こうがこれを認識すると言った」

「認識するかもしれない、よ」

ガラス橋の反対側から人影が答えた。いつからそこに立っていたのかわからない。灰色の作業外套、折り畳んだ布の覆面。武器は持っていない。襟元には小さな機械があったが、補聴器なのか化学サンプラーなのか記録装置なのか、ロイには判別できなかった。

「縁を見せろ」

ナディラが証票を九十度回す。人影は橋の鉄の手摺にある細い投入口を示した。円盤が差し込まれると、見えない何かにぶつかってから別の穴より戻り、乾いた砂粒が数個付着していた。

「その前は誰が持っていた？」

「ハリス・サマド」

「そのさらに前は？」

「知らない」

「なら、求めているのは相続ではない。証人だ」

ロイが橋に一歩踏み出す。相手の襟元で、ごく微かなクリック音がした。隠れた拘束機構が閉じる前に対岸へ達する最適角度を、身体が瞬時に算出する。計算そのものには測定可能な消耗はない。実行すれば、二度と補充できない何かを失うかもしれない。

「NAR-41 に署名した者を探している」

人影が初めて彼を正面から見た。小さいが、紛れもなく人間的な動き。そのため襟の機械より多くを語っていた。

「顔は外に置いてこい」

＊　＊　＊

入口の部屋には鏡があった。ただし普通の意味で像を映すものは一枚もない。それぞれが来訪者の異なる近似を返した。熱の輪郭、骨密度の投影、その人物を消した周囲の室内像。最後の面では、ロイの衣服だけが空中に浮いていた。ナディラは四枚すべてに見分けのつく姿で映った。

「識別スクリーンか」

「否定のスクリーンだ」と係員が答えた。「有用な証人は、そこになかったものを証言できなくてはならない」

持ち物は物理検査され、ナディラの手首通信機だけが返却されなかった。通信機は鉛を裏打ちした引き出しに入れられた。真鍮の銘板に刻まれた日付は二人が生まれるより古い。係員はロイの登録証を求めなかった。接続することを拒否したシステムから、記録を要求できる者などここにはいない。

二枚目の扉を越えるとSTEPWELLそのものがあった。名は比喩ではなかった。巨大な円筒の貯水井が幾層もの石造床を貫いて落ちている。壁に沿う階段は乾いた踊り場で途切れ、そこには秩序のわからない並びで戸棚が置かれていた。内壁の水路にはゆるやかに水が流れ、門を通るたび小さな水車が回り、機械式計数器を一つ進める。その数字を机に座る書記が帳面へ写した。中央には重りをつけた鉛直線が吊られ、遥か下の黒い水へ消えていた。

千年分の建築様式より、ここに差し込む光の方が説明しがたい。ランプではない。竪坑の上縁に、空を直接見通さないレンズと導光路を通って散光が入っていた。光は伝えられ、遅らされ、弱められ、再配分される。ここにはネットワークがない。しかし、単純なものも一つとしてなかった。

「モスクか？」

「違う。でも祈った人はいる。銀行と言った方が近いかも。株主が死んだ後も、自分の負債を覚えているべきものを銀行と呼ぶならね」

迎えたのはサリム・ダルウィーシュという老記録官だった。左右で厚さの違う普通の眼鏡をかけ、背表紙の割れた革張りの台帳を胸に抱えている。若者なら両手で運ぶ重さだった。

第七踊り場の卓へ案内すると、サリムは証票を木の窪みに置き、黒、青、紫のインクで注記された頁を開いた。スキャナーもタッチ画面もない。古い技術を演じるための芝居すらなかった。

「NAR-41。資産ではない。資産を処分する権限に対する制限だ。権力を持つ者は、よくこの違いを見落とす」

「資産とは何だ」

「二つの器具。一つのプロトコル。一つの拒否権。初めの二つは数えられる。三つ目が、ここがまだ存在する理由だ」

サリムは蝋印の列を指した。最初の二つは小型の法的印章に似ていた。三番目は空白で、熱した道具で紙へ焼き込んだような、交差する二本の弧だけが残る。

「これが欠けていた署名ね」とナディラ。

「署名を必要とした証拠だ。署名者が人間だったという証拠ではない」

ロイは黙っていた。サリムは恐怖ではなく、床下で動く機械の音へ耳を澄ませる人間の慎重さで彼を見つめた。

「台帳には発音できない名前がある。それでも、その者の場所は残せる」

＊　＊　＊

岡京で川村室長が見せられたのは、彼の省の測量装置では発見できなかった扉の写真だった。若い将校が推定材質、推定管轄、推定指揮系統を書き込んでいる。すべての確率は、元の記録庫にアクセスできないアルゴリズムによって算出されたものだ。

「信頼度の数値を消せ」

「大臣は技術評価を求めています」

「なら評価を提出しろ。欠落したデータから生まれた迷信ではなく」

机の向こうで、人工生命法令適合の専門官が発言を待っていた。二度の組織改編を経て三つの省で働いた女で、文面より先に紙の縁を確かめる癖がある。胸の徽章が示す勤続歴は実際の経歴より短い。統合行政では勤続歴は更新できる。人間は更新できない。

「位置の範囲は絞れています。PUDU-α の旧水利施設の地下。閉じた保管体系です。地元の水利当局は管轄を否定しています」

「当然だ」

「制限なしの市内捜索を起動できます」

川村はファイルを閉じた。「そして NAR-41 を中央推論メッシュに流すのか」

「原文書はメッシュに渡りません」

「渡るのは我々の質問だ。質問は答え以上に多くを明かす場合がある」

専門官は黙った。別の画面には人工生命ライフサイクル調和法案が、次の大臣審査を待っていた。SLC-6。登録されたすべてのレプリカントの寿命を最大六年とする制度だ。草案では、構造偏差の蓄積を防ぐ普遍的安全策と呼ばれる。現在の個体は長ければ二十五年稼働する。この短縮は公示では短縮と呼ばれない。「収斂」と呼ばれる。

川村は言葉を偽装として信頼していなかった。偽装など不要にする機構の方を信じていた。

旧水路の外に包囲線を維持し、顔ではなく物品の物理的移送を監視し、未知個体は損傷させず回収せよ。そう命じた。自動作成される省内報告で、「タイレル」「継承」「更新」の三語を同じ文書に含めることも禁じた。

専門官が去ると、川村は角の柔らかくなった紙のファイルを開いた。彼自身の署名入りの資金承認書。何年も前、ありふれた雨水再生事業の名目で研究費を交付したものだった。受領者は一人の

女。彼女は川村の最も重要な質問に答えなかった。敵意ではなく、妙に楽しげな忍耐をもって。その態度は敵意より彼を不安にした。

女の居場所は知らない。かつて彼女が、いまや複製不能な技術文書を保有していたことは知っている。そして、彼女の研究は省が公式に認められるどの研究所より速く進んでいると疑っていた。

承認書の次の頁に、時代遅れの民間型式名が薄い活字体で記されていた。読めるのは数字だけだった。07。

川村はファイルを閉じた。

＊　＊　＊

サリムは卓にガラス筒を置いた。内部に端が不揃いの巻紙がある。ナディラには見ることだけを許し、触れることは許さない。封印は破られていなかった。権原を示せない来訪者のために開くつもりはない。

「第三の証人は器具を譲渡するために署名したのではない。譲渡が、ある個体の所有権移転と誤解されるのを防ぐために署名したのだ」

「何の個体だ？」

「文書にはない。継続性について述べている」

「便利な抽象語だ」

「法に守るべきものの分類がないときには、必要な抽象語でもある」

ナディラが器具はクチンを通ったのかと尋ねた。サリムは台帳の表を指でなぞり、細い赤印で止めた。

「そこで通過証明が発行された。器具が保管の境界を越えたことは証明する。荷下ろしされたとは証明しない」

「今どこにある？」

「現保管者は沈黙する権利を行使している」

「タイレルの息子か」

サリムは答えなかった。否定ではない。この街では沈黙が、個人に許された最も高価な発言であることもあると、ロイは知り始めていた。

「連絡する方法は？」とナディラ。

「請願をどこへ届けるべきかなら教えられる。それだけだ」

老人は古い写真フィルムに似た半透明の保存紙を出した。四行の宛先が印刷されている。都市名はない。代わりに法的受領者の連鎖と、配達条件が記載されていた。

WITNESS PRESENT; NO MIRRORED RECORD.
証人立会い。同期記録の作成禁止。

ロイには意味がわかった。請願は人間の証人の前で口頭提出しなければならず、同期複製を残せない。惑星規模でメッセージを送るには、途方もなく高価な方法だった。高価であることこそ狙いなのかもしれない。

「なぜ非効率な方法を保存する？」

「すべてを記憶するシステムは、別のことを記憶するよう命令されることもあるからだ」

サリムはガラス筒を持ち上げた。「紙は燃える。金属は腐食する。証人は死ぬ。我々は永続性を主張しない。改竄すれば傷が残ると主張する」

ロイはロサンゼルスの屋上の後に続く、空白の期間を思い出した。覚醒後の日々、彼は傷跡のない記憶に傷跡を探していた。七から十までと呼ばれた身体の証拠が、どこかにあるのだろう。だがそれは、もう最優先の問題ではない。ここに立つ生きた身体には製作者がいて、終わりの日付は不明。その問いなら自分で動ける。

「請願はどうすれば出せる？」

サリムは井戸の最下段へ降りる階段を見た。

「まず、提示されるものを拒否できる者からの請願であると証明しなければならない」

＊　＊　＊

二人はさらに冷えた空気の中を狭い階段で下りた。湿度が上がり、鉱物を含む水と古い電池の匂いがする。最下部には机、椅子、普通の本ほどの大きさの装置があった。コンピューターではない。陶製の筐体に機械式スイッチが二つ、小窓が一つ。文字が一字ずつ現れる構造だ。

係員は灰色の紙に印刷された新聞を読んでいた。ロイとナディラを見上げ、紙面を丁寧に脇へ置く。

「これは人間性の検査ではない。そんなものを測る器具は、ここにはない」

「何を検査する？」

「贈り物として差し出された認証を、あなたが断れるかどうか」

係員が封筒を卓に置いた。表題によれば、システム障害時に以前登録された状態へ復旧させる許可案が入っている。裏の黒い印章は、ロイの右手首を意思に反して収縮させた。あの二本の弧だった。

「開けたければ開けていい。選択はあなたのものだ」

ロイは手を伸ばさなかった。内部処理は、封筒の内容を推定し始めていた。まだ実行権限は提示されず、通信を試みる機械もなかった。それでも身体は印章の配置を意味のある模様として認識した。意識的な言葉より深い場所で反応が起きる。ある幾何学形状が近づくまで不活性にしておいた命令が、構造の中に書かれているかのように。

彼は長いあいだ封筒を見た。

「開けたら何が起こる？」

「何を提示されているか知る」

「俺の選択の記録は？」

「選択が行われた事実を記録する。あなたが何者かは記録しない」

ナディラは何も言わなかった。地下水が水車を回す音がする。遥か上では都市のドローンと国家登録機構が、存在を許されるためには読解可能でなければならない住民を数え続けている。ここでは水の下の部屋で、一人の男が、次の覚醒を決めるかもしれない文書を受け入れるか問われていた。

ロイは封筒を押し返した。

「まだだ」

係員は鋼の筆で記入した。失望した様子はなかった。

「それで十分だ」

ロイに安堵はなかった。拒否によって、ひとつ知らなかったことがわかった。拒否する権利を礼儀ではなく技術的条件と考える人間が、この世界にはいる。自分が造られる以前に、そんな条件を設計していたのなら、彼らはロイが何を受け入れさせられることを恐れたのか。

係員は配達票を開き、乾いた印章を押した。圧力をかけるまで見えなかった二行目が浮かぶ。

CUSTODY CHANNEL OPEN — SINGLE PETITION.
保管経路開放——請願一件限り。

宛先はまだ完全ではない。しかし答えへ向かう経路がひとつできた。それを得るために身体を明け渡す必要はなかった。

＊　＊　＊

階段を上ると、上層の井戸の音が変わっていた。一つの計数器は止まり、別の一つは速く回りすぎていた。第七踊り場には、閉じた台帳に両手を置いたサリムが待っていた。

「来客だ」

ロイは耳を澄ませた。最初は水だけ。やがて石の中に新しい周波数を感じた。古い鉄の支柱を伝わる、慎重に繰り返される振動。追跡者はまだ STEPWELL へ入っていない。外から構造を測量しているのだ。

「どれくらい持つ？」とナディラ。

「待つ代価が、姿を見せる代価より高いと相手が判断するまで」

天井の細い真鍮の鈴が一度鳴った。隣室で書記が採光シャッターを閉じる。竪坑は階ごとに暗くなり、光が一層ずつ引き上げられていく。警報は鳴らない。走る者もいない。

サリムは封印された請願書とインクで描いた経路札をナディラへ渡した。旧地区の川側に出口がある。朝の放水で開く水門を通るのだ。ロイは所要時間、捜索ドローンの推定位置、水門が故障した場合に点検用の隙間を登るのに必要なエネルギーを計算した。緊急出力の閾値を下回る。潮が開いてくれる扉のために、体内の液体を消費する気はなかった。

「なぜ助ける？」とロイ。

「断ったからだ」

「説明になっていない」

「ここにいない者の代弁をせずに言えるのは、それだけだ」

二人は消灯した通路へ向かった。途中でロイが立ち止まり、記録官を振り返る。

「ネットワークなしで記録を守れるなら、なぜ知っていることを公開しない？」

サリムは疲れた目で微笑した。「公開もまた保管の一形態だ。誰にそれを預けるべきか、まだ決めていない」

封鎖された部屋の外で、金属が薄く擦れる音が壁を伝った。何かが継ぎ目を探していた。

ロイはナディラに続いて闇へ入った。タイレルの器具に手が届くという証拠はまだない。壊滅的な障害の後でシステムを回復する方法も、残る寿命の測定値もない。ただ一つ手に入れた。自分の返事に意味がある手続きだった。

STEPWELL の上で、国家は石の声を聞く方法を学び始めていた。その下で古い機械がもう一回転し、水量の一単位を記録した。守られる証人が生まれたのか、製造されたのか、死から連れ戻されたのかなど、その機械にはどうでもよかった。